

朝鮮石人像を訪ねて (75/最終回)

深田 晃二

何か新しい情報は無いかとたまにネットで石人像を検索するが、今年5月にあるブログで朝鮮石人像の記事が載っているのが目にとまった。一年以上前の記事だったが、そのブログに私が投稿したことから始まって、いろんな良いご縁ができたので紹介したい。

1. 埼玉久喜市K医院

「埼玉の酔仙」とはブロガーの名前であるが本名はフルネームで教えていただいている、埼玉に住むY氏である。そのブログには2体の石人像（波形冠の文人像）の写真が載せてあり、「先月まで植木鉢などがあったK医院の玄関先に朝鮮石人像がデーンと据えられていたのでビックリした。」「先生すごいのが立ちちゃってますね」「いやあ、たまたま見つけて気に入ったので買った」といった軽快なやりとりが載っている。

はて、むくげ通信302号（訪ねて64）で書いた、深大寺開山堂の望柱石を見ている時に、軽井沢の室生犀星文学碑横の石人像を見てきたと電話を貰った、あの埼玉の先生ではないか？と思い当たり埼玉の酔仙氏に確認してもらったら、K先生の方でも、そんな話をしたなーと思い出されたとのことで、予想は的中した。Y氏の言うとおりの縁というのは不思議につながるものである。

グーグルマップの検索欄にN36.08606,E139.68292と入れて、Street Viewで石人像を見ることができる。

この話にはおまけがついていて、K先生の患者で近所の古い農家さんにも朝鮮石人像があるとのことで、Y氏から写真を送って貰った。梁冠の立派な文人像2体である。この農家さんは大小7体のトルハルバンもお持ちだ。K医院のものと合わせていつの日か訪問し、色々とお話を伺いたいと思っている。

2. 「日本のなかの朝鮮文化」50巻

私の調査した朝鮮石人像所在リストをY氏に送ると、「結構な数のリストで驚きました。こういった在野での地道な記録、保存の積み重ねが文化の厚みになるのだと思います」とお褒めの言葉をいただいた。あわせて、そろそろ終活に取りかかるので、書棚に眠っている「日本のなかの朝鮮文化」50巻に興味がある人で、引き継いで生かして貰えれば譲っても良いとの話になった。鄭貴文氏により1969年から1981年まで季刊誌として発刊された本だと確認でき、私の持っている金達寿氏の「日本の中の朝鮮文化」全12巻とは全く別物であったので譲っていただくことにした。金達寿氏の12巻は1970年12月から1991年11月までの発行であり、大阪鶴見緑地の多数の石人像が元あった芦屋朝鮮寺の記事が第6巻に載っているシリーズ本だ。

元々Y氏は上田正昭先生の講義で朝鮮文化に興味を持ちこの季刊誌の購入を鄭貴文氏の自宅（現在の高麗美術館）まで申込に行ったとのことである。氏は転勤族で京都にも住んだことがあり、西宮神呪寺の石人像も見たとのことなので、朝鮮に対する造詣の深い方だと推察する。

Y氏は他にも整理したい本があるとのことだったので、古本市をしている学生青年センターの飛田さんを紹介した。ダンボール1箱分を送られたようすがメール文面から分かる。飛田さんからは最近のむくげ通信9冊が届けられているとのこと。私の石人像記事も追々読んでいただいていることだろう。

(1) 朝鮮文化の座談会



「日本のなかの朝鮮文化」

「日本のなかの朝鮮文化」の申し込みが少し遅かったようで、1,2,3,5号はコピーであるが、見事50巻が揃っている。

1号の発行は、1969年3月で、その頃私は大学4年を前に、そろそろ学園闘争（紛争）の影響から抜け出して卒業論文を書こうかという時期だ。

本のサイズはA5版で、座談会を中心にすえた構成になっている。座談会では、日本の中の朝鮮からは始まって、印刷と活字、土器と陶磁器、神宮と神社、仏教と寺院、神話と歴史、文化と政治など、二項を対比した話題や、「めぐって」シリーズでは、古墳、飛鳥、河内飛鳥、有田焼、帰化人、高松塚古墳、古代美術など興味深い話題が満載である。また、王仁系氏族、秦氏、紀氏、漢氏、行基、百濟王氏、高麗氏、天日槍など氏族に関する話題や、日本各地の古代文化と朝鮮との関わりがじっくり議論されている。興味のある山城などもあり、1970年代の著述と言う時代的な制約を考慮しながら歴史を勉強し直すには最適な資料ではないかと考えている。各巻66ページ前後である。

座談会参加者を列記すると次のように当時の各界の錚々たるメンバーが参加されている。参加数は各号3～7人で4人の時が一番多い。当然ながら話題により専門が変わるので人が入れ替わっている。座談会記事は15～25ページくらいと長い。

懐かしい人が多い、氏名が重複しないように列記する。

(1～10号) 上田正昭、金達寿、司馬遼太郎、村井康彦、井上秀雄、岡部伊都子、林屋辰三郎、吉田光邦、三上次男、小山富士夫、長谷部楽爾、湯川秀樹、梅原猛、土橋寛、水野明善、井上光貞、松本清張、尾崎喜左雄、直木孝次郎、森浩一、伊達宗泰。(11～20号) 原田伴

彦、古田実、池田忠一、鄭詔文、永竹威、山沢一則、坪井清足、岩村就司、長谷川誠、井上靖、久野健、谷川徹三、源豊宗、森田進、三木精一、岸俊男、毛利久、李進熙、岡崎敬、菊竹淳一、永留久恵。(21~30号) 大野嶺夫、坂元義種、平野邦雄、田辺聖子、中西進、井上薫、田村圓澄、堀池春峰、橋本澄夫、吉岡康暢、藤沢一夫、大塚初重、高麗明津、和歌森太郎、佐野仁應、水野祐。(31~40号) 上原和、石田松蔵、櫃本誠一、奥野正男、筑紫豊、賀川光夫、泊勝美、中野幡能、飯沼二郎、岡崎讓治、鎌田忠三郎、黒岩重吾、金井塚良一、中野敬次郎、原島礼二、飯島一彦、桐島健。(41~50号) 梅沢重昭、畑敏雄、野村増一、山尾幸久、中尾芳治、檀上重光、松本正信、清水真一、野田久男、伊藤秋男、中西光夫、本多静雄、飯島進、備仲臣通、辰巳和弘、六社恵一 以上である。

半数以上に参加しているのは、金達寿40回、上田正昭36回である。二人が中心メンバーである事が分かる。

(2) 個別記事について

50巻にざっと目を通して、興味があり面白そうな記事のタイトルを上げる。

1. 3号 朝鮮語源の日本地名 宇佐美稔
2. 3号 牛窓港に伝わる朝鮮の踊り 西川宏
—唐子踊りと通信使のこと—
私の出身は岡山で、どうしても故郷の話題には目が行ってしまう。筆者は地元の高校の先生。
3. 4号 備前の中の朝鮮 野村増一
筆者は岡山の史家。座談会にも出席している。
4. 6号 「帰化人」ということば 金達寿
13号では「帰化人をめぐって」座談会がある。
21号に上田正昭の「渡来人と帰化人」がある
43号に上田正昭の「飛鳥時代と渡来人」がある
47号に川上貞夫の「今木と度木」がある
50号に阪根義雄の「渡来人と私の故郷」がある
5. 6号 朝鮮人街道のこと 岡田精司
朝鮮通信使が往来した琵琶湖東岸の道について
45号に李進熙の「通信使と民衆の交流」がある
6. 9号 石上神宮と七支刀 上田正昭
7. 10号 備中のなかの朝鮮 野村増一
43号では「古代吉備と朝鮮文化」座談会がある
8. 12号 行基の足跡 池田信雄
24号では「行基とその遺跡」座談会がある
26号に田村圓澄の「行基と新羅仏教」がある
9. 15号 日本にある朝鮮鐘 坪井良平
10. 16号 日本建築の中に朝鮮建築を見る 杉山信三
11. 17号 消されていた朝鮮式山城 西川宏
24号に李進熙の「謎の朝鮮式山城」がある
37号に樽松静恵の「朝鮮式山城としての高安城」
39号に樽松静恵の「偽装の朝鮮式山城」
41号に前田航二郎の「高安城とその歴史的背景」
12. 22号 新羅・伽耶の旅三題 土橋寛

- 鶺鴒(カササギ)の語源についての解説が面白い
13. 25号 慶州と扶余 邦光史郎
膽星台や武寧王陵の話が面白そう
 14. 26号 二人の知人 永井路子
 15. 28号 出雲の四隅突出型方墳 山本清
通信272号(訪ねて38)でレポートした米子の妻木晩田(むきばんた)遺跡の勉強のために
 16. 29号 東アジアの中の日本 司馬遼太郎
 17. 30号 奠雁(てんがん) 八木一夫
 18. 31号 象嵌(ぞうがん)手の扁壺 八木一夫
 19. 32号 近江の石工集団 中西猛之
—穴太衆の系譜—
 20. 32号 ふるさとにみる朝鮮文化 野村増一
—岡山県赤磐郡山陽町—
 21. 34号 古代出雲と朝鮮文化
—第15回日本のなかの朝鮮文化遺跡めぐり—
 22. 35号 吉備海部と朝鮮文化 岡本明郎
 23. 37号 日本にとっての朝鮮 金達寿
朝鮮侵略の後ろ盾になった神功皇后について等
 24. 43号 座談会 古代吉備の朝鮮文化 5名
 25. 47号 正倉院文書から見た新羅文物 東野治之
佐波理匙、金銅のろうそく切用ハサミなど
 26. 48号 忘憂里 鄭貴文
 27. 49号 石人の風景 鄭貴文
京都嵯峨野の湯豆腐屋の12体の石人
 28. 50号 朝鮮の仮面 中村保雄
—信仰と芸能—
 29. 50号 「日韓併合」以後 梶村秀樹 以上
広く浅くの自己の特性をよく表す選択である。歴史・文化・芸術など広い範囲でもう少し掘り下げたい。
年齢よりも多い連載回数になってきた石人像を終了して、今回入手したこの一連の本を元に、勉強し初めのわくわく感を持って、色んな分野に挑戦してみようと思っている。
なお、Y氏からは、この本をむくげの会で活用してくれと言われていたので、今後そのような方策を考えていきたいと思いつている。
- ### 3. 最後の石人像
- 石人像連載を終えるに当たり、最近20体以上の大量の石人像が見つかったと言うニュースをお伝えします。ただし、差し障りがありまだ公表できる段階ではないとのこと。韓国総領事館に相談し、ゆくゆくは韓国の古石博物館に戻したい意向とのことです。「私の気持ちが変わりますか」と電話で尋ねられ、しばし返事に詰まりましたが、勉強してきたことに基づいて「分かります」と答えが、良かったのかどうか。
- 連載終了とはいえ、引き続き石人像についてはまだ見ていない博物館や資料館などを訪問したいし、時にはむくげ通信にも投稿したい。また念願の本の執筆にも本格的に取り組みたいと考えている。(終)